

基金事業

「東京大学コレクション未来基金」の発足

西秋良宏

はじめに

2022年7月、総合研究博物館は「東京大学コレクション未来基金」事業を開始しました。東京大学コレクションとは、本学が1877年の開学以来、研究や教育のために蓄積してきた学術標本群をのことです。本事業は、このコレクションを確実に維持、活用、発展させるため、ご寄附を募り基金として運用することを目的としています。コレクションが未長く学術を支え、その源泉となることを念じ、「未来」という語を基金の名前に加えました。

事業の趣旨はリーフレットやホームページでも示していますが、書ききれなかったことも含めて、改めて説明させていただきます。

総合研究博物館の現在

総合研究博物館は1966年に発足した総合研究資料館を前身として、1996年に改組、開館しました。2020年には名称を変えないまま再度、改組し、現在では東京大学の学際融合研究施設の一つとして活動しています。学内に蓄積された

学術標本、すなわち東京大学コレクションの収集、保管、活用、公開、そして、その基盤をなす最先端の研究をおこなう。そうした学術標本を基軸とした、東京大学では類を見ない多面的学術活動をおこなう組織として発展してきました。

同時に、全国初の研究教育型のユニヴァーシティ・ミュージアムとして誕生した経緯を十分にふまえ、大学ならではのミュージアム活動を先導する試みを多数実践してきました。例えば、発足当初から今日のデジタル時代を見すえた「デジタルミュージアム」研究を提案しつつ（1996年～）、一方で、大学の収蔵標本を学外に展開する「モバイルミュージアム」という新たな公開発信実験も推進してきました（2006年～）。後者の事業は、都心のビジネス空間さえも学術標本で埋め尽くす東京駅前の「インターメディアテク」開館にもつながっています（2013年～）。

総合研究博物館が収蔵している標本は、地学（鉱物、岩石・鉱床、鉱山、地史古生物、地理）、生物（植物、森林植物、薬学、動物、水産動物、人類先史、医学）、

文化史（考古、建築史、考古美術、美術史、文化人類）など多岐の分野にわたっています（図1）。それらには、太陽系の起源を語る隕石や小惑星で採取された物質、動植物の新種を定義する元となった最初の発見標本、ヒトの進化や日本人のルーツをさぐるために欠かせない人類化石、さらには世界最古の文明が残した遺物、そして文字に書かれなかった日本の歴史を伝える文物などが多数、含まれていて、総数は400万点以上。このコレクションは、まもなく創立150周年を迎える東京大学の学術の歩みや拓がりを示す物証であるだけでなく、現在進行中の研究教育をささえる基盤として次代に引き継ぐべき唯一無二の財産です。

高度な研究をかつて導き、今後も導くに違いない、それら学術標本を独創的な展示手法でもって一般の方々にもご覧いただくべく、総合研究博物館は、展示技術の開発にも取り組んできました。お堅い国立大学とは思えないようなスタイリッシュなデザインをもって展示空間を構成したり、最新のデジタル技術を活用したりする一方で、明治～昭和初期、帝



図1 歴史的な収蔵標本

左) 大森貝塚出土の土器。1877年にE.モースにより発掘され、「縄文時代」の存在が明らかになった。国指定重要文化財；中) 1881年にH. E. ナウマンが記載したナウマンゾウの最初の化石；右) 世界最後の「幻の大蝶」と呼ばれるブータンシボリアゲハの標本。2011年にブータン国王より寄贈された。

国大学時代の本学で用いられていたアンティーク調の什器を再活用した展示をも披露したりしてきたところです。

基金設立の背景と目的

「東京大学コレクション未来基金」は、そのような総合研究博物館の活動基盤である学術標本の保存と発展を推進するものです。ご寄附によって実施する事業は、大きく二つです。

まずは、コレクション収蔵環境の改善です。1966年の資料館創設時の収蔵標本数は総計約130万点と見積もられていました。研究者がそこで研究をやめていれば、その数は増えなかったでしょう。しかし、収蔵標本数は現在では、その3倍を超えています。研究が進展する限り、コレクションは増加するものです。新たな課題の解決のためには新たな標本が必要になることが常だからです。

そこで生じる問題は、コレクションの収蔵スペースです（図2）。実は、総合研究博物館の収蔵庫面積は資料館時代末期の1993年以来、全く変わっていません。増加する標本を収蔵するためにキャンパス外の土地や建物をお借りしてすらいのが現状です。保管場所に困っているのなら、図書のようにデジタル保存したらどうかとの声は多く聞こえますが、実物標本はそう簡単ではありません。物質の内部構造や成分、生物の遺伝情報、

環境変遷の指標物質、ヒトが作った道具の素材や製作法、用法などを知るための新たな分析手法が続々と開発されている現在、専門研究者が学術的手続きをもって収集した実物標本の保存は近々にも、また未来のためにも不可欠です。

抜本的改善のためには施設の拡充、あるいは自前の新施設建造が必要なことは明白です。同時に、標本整理を加速化させ既存収蔵庫の効率的利用を図ること。それらに、基金を活用させていただきま

す。もう一つの用途は、本郷本館展示機能のバージョンアップです。総合研究博物館の展示は、既に言及したインターメディアテクの他、小石川植物園内にある重要文化財建築を利用した分館、自治体連携先である文京区教育センター、さらには国内外モバイルミュージアムなど、各地で広く展開していますが(HP参照)、それらで公開している標本を収集、整理、研究し、展示コンテンツを作成する基地は本郷本館にあります。そうしたコレクションの生成、公開過程そのものを見ていただくという意図のもと、2016年に、本郷本館の展示場を一新し、「UMUTオープンラボ」という常設展示を設けました。標本の収蔵現場や、それらを分類整理したり分析機器を操作したりする研究者の作業を実際に見学できるユニークな施設として好評、これまでにいただい

ています（図3）。これを、さらに進化させ、よりよい環境で研究現場を観覧いただきたいと私たちは考えています。

現在の展示場は学内利用を前提とした資料館時代の展示場をひきついでいるため、一般の方々を広く受け入れるのにふさわしい構造となっていません。そのため、受付を設けるスペースもままならず、かつ、展示空間とバックヤードを区切るセキュリティにも問題をかかえています。また、玄関部からの外気遮断が出来ないことによって展示可能な標本が限られていること等々、問題山積の状況にあります。

総合研究博物館本館は、赤門がある本郷キャンパスに位置しています。日本の学術の歴史と伝統を象徴するキャンパスにある東京大学の旗艦博物館として、来館者の期待に添える環境の充実、整備につとめていく所存です。

おわりに

コロナ禍が始まって以来、ヴァーチャル、オンライン化が加速度的に進行しています。この社会変化において、DX（デジタル・トランスフォーメーション）を推進する意義は今日、明白です。しかし、一方で、あるいは、だからこそ、学術的デジタルデータの元をなす唯一無二の実物標本の安定的継承をになう総合研究博物館の責任が増したことを痛感していま



図2 収蔵室の一例。



図3 「UMUTオープンラボ」常設展示2階の作業スペース。

Ouroboros

す。太古の昔以来、学術を導く原動力は「実物」を目にした時の好奇心や感動であったはず。私たちは、そのような環境を学内に創出し、維持、発展させていく責務を負っています。

国立大学の予算が増えなくなって久しい中ではありますが、東京大学コレク

ションの成長が止まることはありません。コレクションを継承し、発展させ、未来の学術を切り開く基盤をつくるため設立したのが本基金です。成果は、世の中をびっくりさせるような研究や魅力的な展示公開によって広く示していきます。本基金につき、皆様のご高配をたまわ

りたく、心よりご支援、ご理解、お願い申し上げます。



(本郷本館・インターメディアテク館長
／先史考古学)

東京大学コレクション未来基金

本基金にご寄付いただくと、税制上の優遇措置に加えて、以下の2種の特典が適用されます。

特典① 総合研究博物館より

ご寄付くださった全ての方に、当館イベント等のご案内を差し上げます。

●10,000円以上のご寄付

- ・サポーターズクラブ会員証発行
- ・講演会・バックヤードツアー等（オンライン）ご招待

●300,000円以上

上記に加え、・展覧会式典（図録つき）・対面イベントご招待

●1,000,000円以上

上記に加え、研究者がアテンドする博物館内プライベートツアーご招待（日程ご相談、同伴者可）

※詳しくはウェブサイト（<https://utf.u-tokyo.ac.jp/project/ptj146>）をご覧ください。

※ご寄付から3年間の期間中の特典です。

※継続寄付（毎月など）の場合は、累積額が達した時点で対象とさせていただきます。

特典② 東京大学基金より

内容は以下にてご覧いただけます。

<https://utf.u-tokyo.ac.jp/privilege>

ご寄付の申込方法

東京大学基金Webサイトからお申込みください。

<https://utf.u-tokyo.ac.jp/project/pjt146>

※クレジットカード決済、インターネットバンキング決済、銀行振込等からお選びいただけます。



ご寄付についてのお問い合わせ先

東京大学基金事務局

〒113-8654東京都文京区本郷7-3-1

E-mail : kikin.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

Tel : 03-5841-1217（土日祝除く） Fax : 03-5841-1219